

# ニューズレター 第3号

## 大阪学院大学外国語学部

外国語学部は実績主義

—夢を実現した先輩に続いて下さい—

2009年3月30日発行

### 外国語学部の学びのポイント

外国語によるコミュニケーション能力(英語、独語、仏語を読み、書き、聴き、話す力)を最大化することによって、学部生の 1) キャリア形成(教職を含む) 2) 留学 3) 大学院進学をサポートする。

\*\*\*\*\*

### 海外でのホテルマンの夢を叶えて

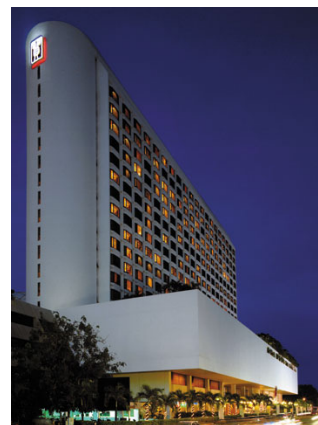
松永剛さん(英語学科 2005年卒業。ロイヤルホテル、リーガロイヤルホテル、ソラーレホテルズ・アンド・リゾーツなどを経て、マレーシアのトレイダーズ・ホテル・ペナン勤務)

私は、現在ペナン島にあるシャングリラ・ホテル系列のホテルに勤務し、日本からの観光客のコーディネーターの仕事に就いています。一般のお客様の対応やエスコートをすることもあり、日本人VIPの対応をすることもあります。それ以外にも、フロント業務を任されることもあり、日本人以外のお客様の対応を他のスタッフと協力しながらおこなっています。海外のホテルで仕事をすることは学生時代からの夢でした。卒業以来、日本国内のホテルで働いてきた私は、いくつもの縁でマレーシアのホテルで働くことになりました。

多民族国家であり多元文化国でもあるマレーシアでは、ローカルスタッフの個々の文化を理解し尊重できなければ一緒に仕事はできません。このアジアの小さな国は現代世界の縮図です。政治家や官僚にしかできない外交があるとすれば、私は民間人にも可能な民間外交があると信じます。日本とマレー

シア、そしていつかは諸外国をつなぐ虹になりたいと願っています。

在学中は英会話の授業をなるべく履修するようにしていました。下手な英語を少しでも話せるようになりたいとの思いからでした。現在でもうまいと言えるレベルではありませんが、外国語学部で学んだことは確実に生きています。当時、私の進路希望は教員(教職課程も履修していました)、旅行会社の添乗員、ホテルマンなど、漠然たるもので就職活動も消極的でした。結果としてホテルに就職しましたが、それが私の性格に合っていたようです。ホテルの仕事をカッコイイとか華やかという声を耳にします。それは表面だけで、実際には別物。他業種と比べ給与も決して高いとは言えませんし、休日も特に多いわけでもなく、勤務も不規則です。お客様から感謝されることよりも、お客様の理不尽な苦情に頭を下げることの方が多いのです。それでも、ホテルマンを続けているのはお客様や他のホテルで活躍する人たちとの出会いがあったからです。お客様のありがとうという言葉、同業のホテルマンの理想や意気込みは励みと生き甲斐を与えてくれました。



(トレイダーズ・ホテル・ペナン)

今後は引き続きホテルマンとしての勉強を続け、いつかはフロント・オフィス・マネージャー、宿泊部長、宿泊担当の支配人の仕事を任せられて、お客様本位の、と同時にスタッフの能力を最大限引き出せるような、自分がこれまでの経験から思いついた理想のホテル造りの夢を描いています。そのためにも、ホテルマンに憧れていた頃の初心を忘れないことと、ホテルで働いて感じた現場第一主義をこれか

らも大切にしていきたいと思います。21世紀は私達若い世代そして女性の時代だと信じています。ホテル業界こそそういう人たちが目指す、魅力のある業界だということが広く認識される日は遠くないでしょう。市民救命士やサービス介助士など、これからのホテル業界に必要とされる人材の育成にも携わりたいとも考えています。日本から世界に羽ばたくホテリアを育てられたら、と夢は尽きません。

夢は諦めなければ必ず叶います。チャンスは回ってきます。自分自身を信じて皆さんの人生をより良いものにして下さい。(マツナガタケシ)



## 夢は日中の架け橋に

塩山恵さん(英語学科2001年卒業、中国政府から奨学金を受けて、北京語言大学大学院在学中)

私は今、北京語言大学大学院で漢言語文字学を専攻し、中国語の語彙や文法の研究をしています。さらに私の「核」である日本語を生かさないと、中国語から言葉が渡ってきた際、どうい変化が起こり、どうい影響をあたえたかという「日本」の角度からも中国語をみつめています。

大阪学院大学で英語を専攻していた私が中国語を勉強したいと思うようになったのは、卒業論文でチャイニーズアメリカンの研究をしたことがきっかけです。研究が進むにつれ、中国本土にいる中国人との違いはなにかと思い始めた4年生の春、偶然にも中国大連で日本語学科の中国人大学生と交流できる機会を得ました。3日間だけの滞在でしたが、その日まで教科書上の「知識」としての中国と実際に自分の肌で感じた中国の違いに愕然とし、無知であった自分に恥じらいつつ憤りを感じました。中国に魅せられた私は、今の両国の関係改善のために何か働きかけがしたいと考えるようになりました。そこでまずは言葉を身につけ、通訳・翻訳などを通さず自分自身で生の、ありのままの中国を知るべきだということから「中国留学をしたい」と強く思うようになったのです。しかし現実は無視できません。その

時にはすでに就職が決まっていたし、留学資金がなく、両親に経済的な負担をかけたくなかったし、社会を知る必要も感じていたので、仕事に就くことを決心しました。それから3年半後の2004年9月、あの時抱いた気持ちと必死の思いで貯めた学費・生活費を握りしめ、北京空港に降り立ちました。

北京語言大学では中国語と教育方面を主に勉強しました。というのも2007年には日中友好正常化35周年を迎えましたが、日本と中国の間にはまだまだ大きな壁が立ちはだかっています。記憶に新しい餃子事件も、食の安全問題にとどまらず、国際問題にまで発展しました。両国民がお互いに不信感を抱き、事件からはかなり飛躍した中傷、極論や暴言が繰り返されました。今両国間の不調和はもともとの問題に加え、情報交換不足やコミュニケーション不足からの理解不足が重なり、さらなる偏見や誤解を生みだしていると思います。

人の心と心が触れ合ったとき、言葉がなくても伝わる気持ちが確かに存在します。しかし誤解をできる限り少なく、より一層の理解を深めるためにやはり、言葉が欠かせないのも事実です。そこで私自身さらに言語を研究し、将来は教員になり、より多くの方に中国・中国語を紹介し、物事の始まりである「興味」をもっていただければと思います。言葉の力を借りて「日中友好の窓口を広げたい」「日中の懸け橋になりたい」、これが私の夢です。

留学中の大学1、2年生のころは成績も悪くクラスで最下位争いをしていました。そんな自分自身に苛立ち、自己嫌悪に陥り「もう無理だ。あきらめよう」と思うことがありました。しかしそんなとき、大きな力を与えてくれたのが大阪学院時代の経験です。

在学中に英語劇、英語スピーチコンテスト、カナダ短期留学をはじめ、パソコン関連の検定取得などいろいろなことに挑戦しました。もちろんすべて成功を収められたわけではありません。例えばスピーチコンテストは、わずかの差で表彰台を逃してしまい、懸命であったがゆえに余計に悔しく、人目をばからず涙しました。しかしその事実を受け止め反省をし、その後スピーキングの授業では先生にどんどん話しかけ、英作文は納得するまで何度も書き直しました。そのかいあってか、その後TOEICの点数

が大幅に伸びました。

勝負には「勝ち」があれば「負け」が、結果には「成功」と「失敗」があります。誰でも負けや失敗は避けたいもの。それを恐れるあまり、挑戦を避けたり、言い訳をすぐに探しがちになります。しかし一番大切なことは、どんな結果であってもその事実をしっかりと受け止めることだと思います。「負」ときちんと向きあえば、それを次に生かすことができます。語学学習はそれが顕著にあらわれるものです。「なんとなく伝わるから」とあやふやにせず、間違いは素直に認め訂正していく。その積み重ねが語学マスターの一番の近道だと信じます。あの学院時代の経験があったからこそ、落ちこぼれで始まった中国留学を成績優秀生として終えることができました。

この大学4年間は、多くの方にとって学生として過ごせる最後の時間だと思います。その時間を大いに楽しみながら、「興味」という色々な「種」を心に植えていただきたいと思います。私も学院時代に植えた中国語の種が長い期間を経てやっと発芽をし、今ちょうど若葉が出始めました。これから大きな花を咲かせるために事実をしっかりと受け止め、挑戦し続けていきたいと思っています。

最後になりましたが、みなさんも大学生活で夢中になれる何かに出会えることを心から願っています。受け止める勇気があれば、みなさんが思い描く「花」はきっときれいに咲き誇るはずです。自分を信じて4年間を享受してください。(シオヤマメグミ)



(2008年北京オリンピック、メイン会場で)

\*\*\*\*\*

## Studying abroad opened my eyes. Take a chance and see the world!

青木香代子さん(英語学科 2002年卒業、2001年8月～2002年5月、ミネソタ州セント・トーマス大学交換留学、2002年12月、留学延長期間を終えて帰国。2008年5月サンフランシスコ大学大学院博士課程教育学部多文化教育専攻を修了(Ed. D)。2008年9月～桑港学園 [Soko Gakuen Japanese Language School:サンフランシスコにある日本語学校] 勤務)

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。アメリカ滞在も約8年になりました。セント・トーマス大学で留学生生活を始めた当初は、ここまで長くなるとは想像しませんでした。改めて考えると、セント・トーマスでの体験が元になって、今ここにいるのだなあ実感しています。

私も皆さんと同じように外国語学部で、多くの学生が思うように「いつかは留学したい」と思っていました。でも、思っているだけでは何も始まりません。それがはっきりと「留学する」となったのは、大学1年生の春休みのハワイ大学の語学研修で、そのときに英語を学ぶだけでは物足りない、アメリカ人と机を並べて勉強してみたい、と思ったからでした。私はアメリカの文化や歴史に興味があったので、よく図書館で本を借りて読んだりしていましたから、留学してもっと深く学びたいと思うようになりました。

TOEFLの勉強を始めたのは2年生の夏休みでした(留学を決心するまでに時間を要したということですが、もっと早く始めておけばよかった、と焦りました。でも、あきらめずに勉強を続けるうちに、交換留学に必要な点数を上回る550点を取ることができ、セント・トーマス大学に留学が決まりました。

しかし、行ってみると、先生の言っていることが分からなかったり、宿題が終わらなかったりと、苦労の連続でした。半年ほどたつと次第に慣れてきて、授業でも少しずつ発言できるようになっていきました。私が興味があったクラスも取れて、このときの授業が大学院進学につながりました。大阪学院で教職を取っていたこともあり、多文化教育への興味が



大きくなったこと、留学生として多様な文化を経験し、日本にいたときの自分が気づけなかったことに気づいたからでした。

セント・トーマス大学は比較的小さな大学ですが、留学生を受け入れる体勢がともしっかりしています。最初のオリエンテーションで様々な国から集まった留学生と、彼らをヘルプする「メンター」達とでグループを作り、親交を深めることができ、また留学生同士が家族のように支えあっているところは、セント・トーマス出身として今でも誇りに思っています。ミネソタの人々もとてもフレンドリーで素朴な人が多く、行ってすぐに町になじむことができました。もう一つ私が体験したことは、地元の小学生の宿題をヘルプするボランティアでした。これがきっかけで、もっと教育に興味をわいてきて、地元の人との繋がりが少しでも築けたことは、とても貴重な経験になりました。

サンフランシスコ大学では多文化教育を専攻しましたが、多様な人々が暮らすサンフランシスコ、授業内だけでは得がたい経験がたくさんありました。もちろん授業でも、どのように多文化教育が学校で生かされるべきか、そのためにはどのようなことを理解しなければいけないか、ということを実践だけでなく実践も交えて学びました。クラスメートも様々な背景を持つ人ばかりで、授業での議論はいつも活発に行われました。彼らがいたからこそいろいろな視点から物事が見られるようになったと思います。

日本で学べないことを学ぶ、これが留学の醍醐味だと思います。日本の外に飛び出すことで、いろいろな体験をして、それが将来につながっていくのだと思います。大阪学院は留学のチャンスが大いにあると思いますし、サポート体勢も整っています。食欲に、いろんなことにチャレンジして世界に飛び出していってください。(アオキカヨコ)



## トリア大学留学で広がる無限の可能性

鈴木和馬さん(ドイツ語学科 2006年卒業。在学中にトリア大学へ交換留学、現在神戸大学大学院国際文

化学研究科在学)

私は、2004年秋から2005年夏まで、ドイツのトリア大学に交換留学した。留学中の様々な経験を通して、大きく成長したと自負している。留学で得られた最大の財産は、様々な国の友人たちである。トリア大学には多くの国の留学生が学んでいて、日本語学科もあるため、日本語を学んでいる現地の学生とも仲良くなれた。これは留学していたからこそ可能であり、日本に留まっていたとしたら、決してできなかったであろう。留学後、今度は日本語学科の友人数人が日本に留学したため、日本で再会を果たすことができ大変嬉しかった。現在でも、当時の友人達とは時々連絡を取りあっている。日本を離れてドイツで生活したことで、日本を客観的に見るのが可能になり、日本とドイツそれぞれの良い点と悪い点を認識できたのも価値があったと思っている。

学院大学からトリア大学への交換留学には無視できない「特典」がある。寮費が免除されることだ。他大学からの日本人交換留学生は寮費を支払わなければならないので、その点で私は経済的に恵まれていた。さらに、大学からの奨学金に加えて、綾野奨学金(トリア大学留学中に亡くなられた綾野睦子さんの御両親の設立による)も支給されたので、金銭面の負担は少なく済み、本当に有難かった。普通に大学に学費を払うよりも、むしろ安く済んだと思う。約1年間の留学期間は、あっという間に過ぎてしまった。現地での日常生活や一人旅でも、言葉にほぼ不自由しなくなり、やっと本格的に充実した留学生在活を送れそうだった頃には、帰国が近づいていた。その時の率直な気持ちとしては、ドイツに留まりたかった。それまでの色々な出来事が頭に浮かび、やり切れなかったことを後悔した。そこで、改めて留学するという目標ができた。

トリア大学留学を通して、自分のドイツ語能力向上の必要性を強く感じさせられた。その上、日本語学科の学生と互いに母語を教え合う上で、日本語を外国語として教える難しさを痛感したことが、外国語教育学に関心を持つきっかけとなり、大学院に進学するという目標も具体化した。紆余曲折を経て大学院に進学してから、幸運にもオーストリアのグラーツ大学での自身2度目の留学の機会に恵まれた。

現地では、ドイツのドイツ語とは異なる発音や語彙を含むオーストリアのドイツ語に触れ、ドイツ語教育関係のみならず、オーストリアのドイツ語に関する授業も履修し、ドイツ語の知識をさらに増やせたことは大きな収穫だった。

現在の目標は、ドイツ語あるいはドイツ語圏に関わる仕事に就くことであり、これから本格的に活動を開始する予定である。トリア大学留学は、現在に至るこれまでの過程の基であり、疑いなく自身の人生における大きな出来事であった。迷っている人も多いと思うが、思い切って留学してみることを勧めたい。留学がその後の人生に大きなプラスとなるのは、間違いないと思うからである。(スズキカズマ)



\*\*\*\*\*

### スウェーデン留学からグランドスタッフに

森澤亜希子さん（英語学科 2008 年卒業。2006 年 9 月からスウェーデンのヴェクショー大学に交換留学、キャセイ関西ターミナルサービス株式会社に就職し、国際線グランドスタッフとして関西国際空港に勤務）

私は大阪学院大学に入学した時から、在学中に長期留学したいと漠然と考えていました。でも、交換留学の応募に必要な TOEFL の勉強はしていたものの、必要なスコアには程遠く、気がつくとう大学の 3 回生、周りでは就職活動がスタートしていました。留学するのは無理かな、そう思っていた時チャンスは訪れました。TOEFL だけでなく、就職活動用に受けていた TOEIC のスコアも交換留学に使えるようになり、スウェーデンのヴェクショー大学に留学で

きたのです。その時の私の TOEIC のスコアは、ヴェクショー大学の要求する点数を 10 点だけ上回っていました。でもこの 10 点のおかげで、私はスウェーデンへの交換留学ができ、留学をきっかけに、その後の進路が大きく変わっていきました。

スウェーデンを留学先に選んだ理由は、スウェーデンの大学は母国語のスウェーデン語だけでなく英語での授業も提供されている点と、これまで自分があまり触れたことのなかった英語圏以外の国で、自分の視野を広げなかったからです。新しい土地で生活することで、もっと自分が成長できるのではないかと、留学の経験を活かして、憧れていたグランドスタッフを目指してみよう、そんな考えが生まれたのは留学経験があったからです。

ヴェクショー大学には世界の様々な国から留学生が集っています。いろいろな国からの、異なった文化背景を持つ学生たちと接することができるということは、とても魅力的でした。留学の目的は様々でも、学ぶ姿勢が積極的で一生懸命だという点は共通していました。そのような環境で学ぶことは非常に刺激的でもありました。

私は今関西空港の国際線でグランドスタッフの仕事をしています。お客様がカウンターでチェックインをし、ゲートで飛行機に搭乗するまでをお手伝いをするのが主な業務です。足が不自由な方には車椅子のお手伝いをしたり、搭乗時間が迫ってもゲートに來られていないお客様を探しに行ったり、業務内容は様々ですが、この仕事の魅力は、いろいろなお客様に出会えること。時にはクレームを受けお客様に怒鳴られることもあります。車椅子の方やお年寄りをケアした際の「ありがとう」という一言や、何も特別なことをして差し上げられなくても旅行者の皆様の笑顔に出会えることでしょうか。そして何とんでも、空港という非日常の空間で働くことは、国際線の飛行機に搭乗して日本を旅立つという、お客様にとって特別な思い出の最初のお手伝いでもあり、他の仕事では味わえない魅力だと思います。

大阪学院大学に在学していた当時は振り返ると、当初は交換留学生になることも希望の職に就くことについてもまったく自信はありませんでした。それでも無理だと決めつけずに何かやってみようとう大学

の様々な制度を利用して行動を起したことで、それがチャンスを作ることに繋がったと思います。もし皆さんの中で留学を少しでも考えている方がいらっしやるなら、決して諦めないこと、そして留学で得たいものを明確にすること、ただ留学だけのための勉強で終わらせないことが大事ではないでしょうか。それが留学生生活をより有意義にすることにつながると思います。 (モリサワアキコ)



\*\*\*\*\*

## オルレアン大学に学ぶ

鈴木準平さん(英語学科 2009年卒業、オルレアン大学へ交換留学)

英語学科の学生にフランス留学は珍しい例です。その珍しい例のひとりである私がオルレアン大学への留学を決めたのはフランスへの興味が募って、自分の目でフランスを見たいと思ったからです。大学では積極的にフランス語の授業に参加しました。フランス語のクラスは履修者が少ないので「少数精鋭」、学生の質問に担当の先生から懇切丁寧な答えが返ってきます。フランスの音楽やフランスの料理、数々の文化遺産などをビデオで鑑賞して、専攻の英語圏の文化とはかなり異なった「フランス」を知ってさらにフランスへの関心が強くなりました。交換留学という制度を知って、これを有効利用しないのは損と考えて、留学することに決め、それからはフランス語の勉強時間を大幅に増やしました。

猛勉強の甲斐あって、念願のオルレアン大学交換留学生に選ばれました。寮費も免除ですから必要経費は食費のみ、日本で大学へ通うよりも経済的です。

フランスでフランス語が勉強できるというのは他の何にも代えられません。初めてフランスへ着いた時、それまで映像で見ただけの風景や町並みを目の前にしてとても感動しました。この国で10ヶ月間、勉強できるという期待に胸が膨らみました。

オルレアンは、パリから南西へ車で約一時間半、ロワール川に面したローマ時代に建設された由緒ある町です。「オルレアンの少女 (la pucelle d'Orléans)」と呼ばれるジャンヌ・ダルクがイギリス軍に包囲されていたこの町を解放したことはよく知られていません。そのような歴史のある町の歴史のある大学(スイスで宗教改革を始めたジャン・カルヴァン、17世紀の劇作家モリエールはここで学んでいる)に惹かれてでしょうか、オルレアン大学のクラスには、アジア、アフリカ、アメリカス、オセアニアなど、世界各国から留学生が集まっています。フランスにしながら、多様な文化背景を持つ人達とフランス語で交流することができました。そのおかげで、フランスのことはもちろんですが、様々な国の文化に触れ、これが自分の宝物になっています。

フランス語でおこなわれる授業には、初めの頃はずついていくのに精一杯でしたが、先生方の熱心でツボを心得た教授法のおかげで、次第に慣れました。やがて自信も生まれて、自分から積極的に発言するのが苦にならなくなりました。「習うより慣れろ」という言葉は語学の勉強にこそ当てはまる言葉だと思います。

先ほど触れたように、オルレアンはフランスの「田舎」の市(人口25万)ですが、オルレアン大学には日本語の講座もあり、日本語を学ぶ人も少なからずいます。私も留学生活に慣れてくると次第に多くのフランスの日本語学習者と交流するようになりました。パーティーやサッカー、バスケットなどで楽しい時間を過ごしました。授業以外でも、図書館でフランス人の友達とフランス語を教わったり、日本語を教えたりしたのも、正規の授業とは違ったやり方で、フランス語学習にプラスになったと思います。

留学の楽しみはなんと言ってもその国を見て回ることです。私も休日には積極的に旅行をしました。鉄道網が発達しているので、速く安く旅行ができます。ベルサイユ宮殿やシャルトルなどのゴシック大



聖堂をはじめ、多くの歴史遺産を訪ねました。留学中の小旅行、大旅行を通じてフランスの文化や歴史を肌で感じ、改めてフランスという国の奥深さを実感しました。

オルレアン大学への交換留学は多くのものを与えてくれました。フランス語の力が伸びたことは言うまでもありませんが、この国の文化や歴史を直接この目で見、生活を体験できたこと、そして何よりも様々な国の人との交流が得難い体験でした。この経験を大切に、これからもフランス語の勉強を続けて、フランスと関わっていきたくて考えています。在学生の皆さんも英語だけでなく、フランス語も勉強してぜひオルレアン大学で学んで下さい。

(スズキジュンペイ)



(オルレアン大学のキャンパスは池[source 泉]の周りに広がっている。植物園から眺めた「泉の宮」。)



### 可能性への挑戦 —私のアメリカ留学—

田辺大智さん(英語学科 2009年卒業。在学中にセント・トーマス大学へ交換留学。2009年8月より、ミシシッピ州の日本企業連合体から奨学金を受けてミシシッピ大学大学院へ留学予定)

大学在学中に何としても挑戦したいと思っていたことがあった。それは英語圏大学への長期留学だった。高校時代、英語は得意な科目ではなかったのに、大学で英語を専攻することを決意したのはそのためだった。入学早々、交換留学を利用してアメリカに

行こうと決心した。交換留学に必要な TOEFL のスコアは高いのに、1 回生の時に受けた TOEFL の結果はそれに遙かに及ばなかった。しかし、あきらめないうでこつこつ努力したのと、先生方のサポートのおかげで、3 回生の後期から 2 学期間セント・トーマス大学へ交換留学が可能になった。セント・トーマスを選んだ理由は、交換留学先の中で一番高い TOEFL のスコアを必要としていたので挑戦心をかき立てられたことと、留学生のためのクラスではなく、アメリカ人学生と同じクラスの受講が可能だったからでもある。どうせ留学するならアメリカ人の学生と競ってみたいという思いがあった。

実際にアメリカで留學生生活が始まってから気がついたのは、アメリカの学生と同じクラスで、同じテキストを使い、同じテストを受け、同じ宿題をこなすことがいかに大変で努力を要するかという(至極当たり前の)ことだった。英語漬けの生活は望んでいたものだったのに、それまで海外生活の経験が皆無に近かったので最初は日常会話でさえ苦労した。クラスでの発表、宿題、グループ・ワーク、ペーパーなど、毎日授業の予習復習に追われた。深夜まで図書館にこもり、何十ページもあるアサインメントや頻繁に課せられるペーパーをこなすこともよくあった。本当に授業中心の生活だった。

それでも日本の大学では経験できなかったような経験から学ぶことが多く有益だった。秋学期に履修したスピーチのクラスで、アメリカ人学生の前で日本についてスピーチをしたのはそのひとつである。こういう経験を経て、ひとまわりもふたまわりも成長したのではないかと感じている。授業以外の経験も貴重だった。特に世界各国からの留學生と友達になれたことは私の世界観を変えた。今までに知らなかった国のことを学んだこと、外国人の視点から日本がどのように見られているかを知って自分(と母国)を見つめるきっかけになった。大学ではクラスの外でもたくさん学ぶべきだと実感した。

約 10 ヶ月間の留學生生活を終え、日本に戻って就職活動を始めたが、もっと勉強をしたいという気持ちを抑えられず、アメリカの大学院への進学を決意した。幸い、奨学金を得て今秋からミシシッピ大学大学院に進むことになった。教員志望だったので、学

院大では教職課程を履修していた。大学院でもその延長でTESL(Teaching English as a Second Language)を専攻する予定。留学経験や大学院で学ぶ英語教授法を生かして、教壇に立つのを夢みている。交換留学は「お客様」。今度の留学は真剣勝負。要求されるレベルは遙かに高く、それだけ勉強に時間とエネルギーを使うことを覚悟して、夢を実現させるべく、挑戦を続けたい。(タナベダイチ)

編集後記

「ニューズレター」第3号をお届けします。今号は、留学と大学院進学、海外で活躍している先輩を紹介しています。外国語学部は「学びのポイント」として、留学と(他大学)大学院への進学のサポートをあげています。これまでの実績には、大阪大学、神戸大学、関西大学、兵庫教育大学など、関西の国、私立大学大学院をはじめ、海外の大学院への進学が含まれています。紙面の制約があって、今号には掲載していませんが、Leeds Metropolitan 大学(イギリス)大学院へ送り出した卒業生は、Peace and Conflict Resolutions(平和と紛争解決)を専攻し、成績優秀で(with Merit)修士号を取得しました。

大阪学院大学外国語学部は地味な大学の地味な学部ですが、**入学後に学生の潜在能力を引き出す**という点では、他のどんな大学にも負けないと自負しています。その言葉を裏付けるのが、定員の小さい学部だからこそ可能な、学生の特性や進路にあわせたきめの細かい指導です。詳細は外国語学部のホームページをご覧ください。**偏差値では大学(学部)の教育力を測ることはできない、ということから実績によって示していくつもりです。**

留学に関わる新しい取り組みが、「他言語兼修専攻」の立ち上げです。専攻語の英語以外に、ドイツ語かフランス語を学び(アメリカの大学のdouble majorに相当)、交換留学可能なレベルまで引き上げることを目指します。それを可能にするために、1年次で「留学準備」を開講して、交換留学に備えます。トリア大学(ドイツ)やオルレアン大学(フランス)以外にも、ヨーロッパ圏には本学と交換留学協定を締結している大学が10校以上あります。スウェーデンやフィンランド、オーストリアやスイス、オランダへの留学も可能です。外国語学部に入學した皆さんには、ぜひ交換留学を目指して下さい。外国語学部の実績主義、夢を実現した先輩に続いて下さい、という言葉信じて。



(言語学部の研究室と教室がある  
ミシシッピ大学ボンデュラント・ホール)

「ニューズレター」 第3号

発行 2009年3月30日

発行者 大阪学院大学外国語学部

発行者住所 〒564-8511 大阪府吹田市岸部南二丁目36-1

(電話)06(6381)8434

(学部 URL) <http://iteachers.jp/ogu/>